

特集 南アジア

成長力秘めた 大動脈

世界全体の4分の1に近い約16億人の人口を抱える南アジア地域。政治問題や開発課題を抱えながらも、急速に経済発展を続けている。同地域の潜在力と、各国に寄り添う日本の協力に迫る。

成長加速するも、
域内協調は課題

多くの民族、宗教、文化、言語などが入り混じり、経済規模も政治システムも国によって異なる南アジア地域。それでも一帯の国々は、やはり文化的な連続性を持っている。

日本の多くの人々にとっては、同じアジア圏とは言え、南アジアは地理的にも心理的にも東南アジア諸国に比べると遠く、同地域の情報に触れる機会

は意外と少ないのではないだろうか。

南アジアには、貧困や所得格差など、さまざまな開発課題が残されている。しかし、その一方で、今日、世界で最も急速に成長する地域として、注目を集めつつあるのも事実だ（世界銀行2014年「南アジア経済報告」）。地政学的にも、東南アジアと中東をつなぐ交易路に位置することから、同地域の社会的安定と経済発展は、日本にとっても戦略的な重要性を持つ。

南アジア地域の範囲については、いくつかが考え方が異なるが、1985年に発足した南アジア地域協力連合（SAARC）の現加盟国はインド、スリランカ、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、ブータン、モルディブ、アフガニスタンの8カ国となっている。

SAARCの実態はというと、東南アジア諸国連合（ASEAN）に比べ、域内間の経済活動は鈍く、まともにも弱い。協調を妨げる最大の要因は、インドとパキスタンの政治的対立だ。両国は、1947年にイギリスから独立する際に、宗教問題が原因で分離独立し、それ以来、対立を続けている。この他にも、域内の輸送費や関税が高いことなど、課題は多い。

「複雑な課題を抱える南アジアの現状を理解する上では、中国の動向にも注目しなければなりません」。国際基督教大学の近藤正規氏はこう指摘する。

編集協力：近藤正規 国際基督教大学教養学部上級准教授



特集 南アジア
成長力秘めた大動脈

South Asia

アフガニスタン

パキスタン

ネパール

ブータン

インド

バングラデシュ

モルディブ

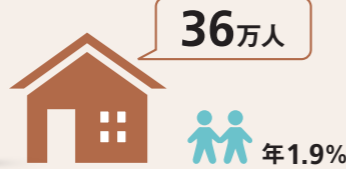
スリランカ

アフガニスタン 紛争終結から11年、復興に向けて歩み続ける



主な産業：農業（果実、ナッツ）、宝石

モルディブ インド洋に広がる1,200の島々



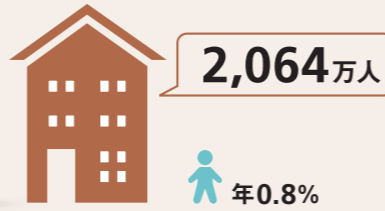
主な産業：漁業（マグロ、カツオ）、観光

パキスタン インダス川流域に広がるイスラム国家



主な産業：農業（コメ、小麦）、綿製品

スリランカ 紅茶で名高い教育と長寿の島



主な産業：農業（コメ、紅茶、ゴム）、衣料品

日本はこれまで、南アジア地域とASEAN地域を結ぶ交通網の整備や、スリランカ最大の港湾であるコロンボ港の開発などを進めてきた。「これらの大型インフラの整備は、南アジア諸国間の貿易や、域外諸国との交易を加速させるものです。中長期

日本と南アジアを結ぶ協力・交流

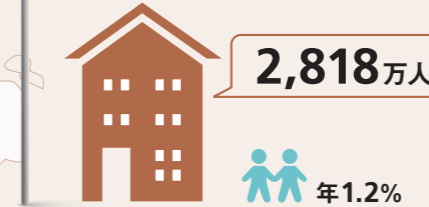
南アジア地域の総人口の7割、国内総生産（GDP）の8割を占めるインドは、同地域のリーダー的存在であるにもかかわらず、長年、周辺国への経済支援は積極的に行ってこなかった。そこに中国が接近し、経済支援や武器支援、貿易拡大などを通じて南アジアにおける影響力を強めているのだ。中国のこのような動きに対する警戒心を背景に、昨年5月に強力なリーダーシップを持つナレンドラ・モディ氏が首相に就任して以降、インドも周辺国に対してより協力的な姿勢を示すようになった。

ブータン ヒマラヤ山脈をいただく伝統と幸福の国



主な産業：農業（コメ、果実）、水力発電

ネパール 民主化の道を歩む山岳の国



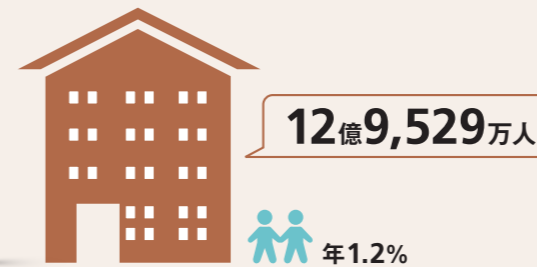
主な産業：農業（コメ、ムギ、ジュート）、繊維製品

凡例



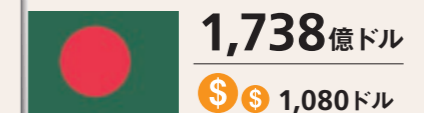
出典：世界銀行統計（2014年）、外務省

インド 人口は世界第二位、10年後には世界最大の国に



主な産業：農業、工業（自動車、バイク）、情報サービス

バングラデシュ パキスタンから分離、水の豊かな「黄金のベンガル」



主な産業：農業（コメ）、衣料品

的に、インドとパキスタンの関係が改善すれば、経済発展の効果は南アジア地域全体や域外の地域にも波及します。そうなれば、S.A.A.R.C.の結束も強まることでしょう」と、近藤氏は予測する。現時点で南アジアに拠点をを持つ企業がさほど多いとは言えない日本にとっても、この地域のインフラ整備は、将来的な進出拡大の基盤となる。その一方で、ビジネスに念頭を置いた協力以外にも、防災分野のように日本の知見や技術協力に対する期待は大きい。例えば、2004年末にスマトラ沖大地震がアジアを襲った際、モルディブの住民を津波から守ったのは、日本の支援で建設された防波堤だった。また、全世界の貧困人口の4割以上を抱えている南アジアに対する貧困対策支援は、国際社会全体への貢献にもつながる。最後に、開発課題への協力と同様に大切なことがある。それは、私たち日本人の人々がもつと南アジアを「知る」ことだ。同地域はインドをはじめ、総じて親日国である一方、日本との間の文化や学術面などでの人的交流は限定的だ。互いの国を訪れる旅行者の数も、東・東南アジアに比べると圧倒的に少ない。より活発な交流を展開し、日本人の人々が「南アジアらしさ」の魅力に触れ、国際社会で存在感を高めてつあるこの地域の躍動の息吹を感じる必要がある。